藤沢周平

又蔵(またぞう)の火

文春文庫

192—10

定価はカバーに
表示してあります

又蔵の火

1984年11月25日　第1刷
1984年12月15日　第2刷

著者　藤沢周平

発行者　西永達夫

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL　03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-719210-1

又蔵の火

藤沢周平

目次

又蔵の火　七
帰郷　九五
賽子無宿　一五五
割れた月　二一一
恐喝　二六三
あとがき　三二四
解説　常盤新平　三二七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

又蔵(またぞう)の火

又蔵(またぞう)の火

村の若い者が犬をからかっている。

遠目にハツはそうみた。犬は低く腹這った位置から、幾度か跳躍を試みようとするが、若者はそのたびにすばやく躰を鼻先に寄せて威嚇し、犬の動きを押えている。それが近づいてみて、若者がこの間から自分の家に滞在している又蔵だと解ったとき、ハツの円い顔に思わず微笑が浮かんだ。父親の源六が又蔵様と呼んでいるその若者は、寡黙で近寄り難いようなところがあり、犬をからかって喜んでいるような人柄には見えなかったのである。

犬はハツも知っている赤犬で、飼主もなく、村の中をうろついている野犬である。肋(あばら)の骨が数えられるほど痩せていて、開いている背戸口から忍びこんで台所を荒したり、夜の間に鶏小屋を襲って、鶏を引き裂いたりする。手出しをしなければ、人間を襲うことはめったにないが、それでもこれまで何人かの村人が噛まれている。それでいていままで人に捉まったこともない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

軽捷で狂暴な野犬だった。

だが、五、六間の距離まで近づいたとき、ハツの顔から微笑が消え、かわりに恐怖のいろが浮かんだ。犬と人との間に、ただならない険しい空気が張りつめているのに気づいたのである。

赤犬は地に胸をこすりつけ、尻を高くした姿勢から、無気味な唸り声をあげている。唸るたびに、開いた口に赤らんだ日の光が射しこみ、赤い粘膜と鋭い牙が光った。低く地に沈めた躰は、思いきり後にひかれ、伸ばした肢は、時おり苛立たしく地面を掻いて向きを変えたが、凄まじい跳躍力を溜めて、曲げられた鋼のように、前を塞いだ人間にとびかかる隙を探っていた。

又蔵も、赤犬をからかってはいない。やや腰を落とし、右拳は刀の柄を握っていた。軽く左足を後に退いて、瞬きもしない眼を赤犬に注いでいる。又蔵の躰の中にも、曲げた鋼に似たしなやかなものが張りつめているようだった。

――やめて――

ハツは叫ぼうとしたが、声が出なかった。思わず大根を入れてある竹籠を地面におろして、近寄ろうとした。

その時、逆光の中の風景が激しく揺れた。遠い砂丘の背後に落ちようとする真赤な日の光の中で、人と獣の黒い影が交錯し、ぎゃっという犬の叫び声がした。赤犬の躰は、空中に飛び上ると、黒い噴水のようなものの迸(ほとばし)りを赤い空に残しまま、どっと地面に落ちた。瞬間、ハツは小さく叫び声をあげて、眼を掌で蔽うと、その場所に蹲(うずくま)ってしまった。

やがて足音がして、ハツの前で停った。

又蔵だと解ったが、ハツは顔から掌を引き離すことが出来なかった。新しい恐怖が、ハツを摑んでいる。

子供の頃、母親にせがんで聞いた昔話で、山姥というのがあった。何度聞いてもその話は怖ろしかった。山姥は深夜、人肉を刻んで喰っている。その夜山姥の家に泊めてもらった旅の僧が、小用に起きてそれを見てしまう。怖ろしさに顫えながら逃げ出そうとしたとき、運悪く物音を立てた。山姥が出てくる。日暮れに一夜の宿を頼んだときは、福相の老婆だったのが、いまは口は耳まで裂け、眼には燐光を燃やしている。「見たな」と山姥が言う。「人を喰っているところを見たな」――

だが、又蔵は、低い声で詫びただけだった。

「済まん」

ハツは眼をあけた。又蔵の浅黒い顔には、当惑したような表情が浮かんでいる。

「刀の斬れ味を試してみたのだ。人にもらったものでな。そなたがみていたのに気がつかなんだ。許せ」

足早に立ち去って行く又蔵の後姿を見送りながら、ハツはその若者がますます解らなくなった気がした。

ハツの家は、羽州十四万石鶴ヶ岡のご城下から、西に三十丁ほどの距離にある井岡という村

にある。背戸口のあたりの軒が、腐蝕して垂れ下っているその家に、又蔵が現われたのは五日ほど前である。

日が落ちれば、灯す油もない百姓家である。その夜ハツはいろりの火明りのそばで居眠りをしていた。十六のハツは昼の間は村の肝煎をしている家に雇われて、大人一人前の働きをするが、夜はすばやい睡気が若い躰を襲うのである。父の源六が、炉端で草鞋をつくりながら、時どき「早く寝ろ」と叱る。そのたびにハツは驚いて顔を挙げるが、すぐにまた快い眠りに引きずり込まれる。榾火のぬくもりが、血管を刺戟し、筋肉の間に溜った疲れを解きほぐしているのを感じる。

又蔵が来たのはそんな時刻だった。異様な恰好をしていた。首から汚れた風呂敷包みを背負い、手拭いで顔を包み、菰包みを脇に抱えて、まるで乞食の風体だったのである。その夜から、又蔵はハツの家の客になった。

次の日の朝ハツは、源六から、又蔵がご城下の土屋様という御家中の人間で、いま中風で寝ているハツの母親がむかし乳をさし上げた人であることを聞いた。

「村の人には、触れるな」

と源六はハツの口を封じた。

それが、又蔵が乞食のなりをして来たことや、朝になって菰包みからいかめしい刀の鐺がのぞいていたことなどと関係があることを、ハツはおぼろに理解した。しかし源六はそれ以上詳

しい話をしなかった。

又蔵は一日中家の中にごろごろしていた。時折り、暗い寝間に寝たきりで、口も利けないハツの母親のそばに黙って坐り込んだり、庭の隅の鈴なりに実が熟れている柿の木の下に立って、じっと城下の方を眺めていることもある。異臭に包まれて寝ている母親を、又蔵に見られるのが、ハツは恥ずかしかったが、あるとき又蔵が低い声で母親に何か話しかけているのをみてから、恥ずかしさは消えた。ハツは又蔵を優しい人間だと思った。

それでもハツが又蔵から受ける近寄り難い感じは変らなかった。又蔵はひどく寡黙で、いつも何かを思いつめている顔をしていたからである。

ある夕方、ハツは又蔵がまた柿の木の下に立っているのをみた。

穫り入れを終わった黒っぽい野面をへだてて、北の方に鶴ヶ岡の町の屋並みが遠く扁平にひろがっている。又蔵は、足音をしのばせて後を通ったハツを振り返りもせず、腕組みをしたまま鶴ヶ岡の方を眺めていた。暗く険しい横顔をしていた。

――この人は、誰かを待っているのでないだろうか――

ハツはその時ふとそう思った。

その夜、又蔵は珍しく「鶴ヶ岡に行ってくる」と言って出て行った。源六の襦袢（じゅばん）と股引を借りて、百姓姿だった。

「だだ（父さん）」

その後でハツは声をひそめて父親に言った。
「あの人は誰かに会いに行ったなだろか」
「さあな。わかんねえな」
「だってここさいるのは、誰かを待っているなだろ。その人が来ないさけ会いに行ったんでねえだろか」
「違うで」
源六は煩げに否定した。
「女子はさべっちょ（お喋り）ださけ、余計なことを覚えねえでもええ」
だがハツが膨れ面をしたので、源六は舌打ちして言った。
「又蔵様は江戸で剣術の修業をして来たなだど。今度仕官の話が決まっての。秋田の亀田のご城下に行かれるので立ち寄っただけだ」
「んだば、どうして鶴ヶ岡のお家さ行かねなだろ？」
源六はまた舌打ちして、少し事情があるのだと言った。
又蔵は数年前に兄の万次郎と一緒に荘内藩を脱藩した。その後その万次郎という身持ちの悪い兄が人に殺されたりしたので、家にも顔を出せない身分になっている。今夜はよそながら家を見に行ったのである。
「立ち帰り者は罪になる。そういう人どご家さ置いたことが解っど、組の衆さも迷惑かけるこ

とえなる。村の衆さに又蔵様のことを一切触れるんでねえぞ」

源六は極めつけるように言った。

赤犬を斬った日から三日目の寒い朝。又蔵は起きるとすぐ庭に出て、井戸の脇で下帯ひとつになると水を浴びた。それから家の中に戻り、ひとりで髪を梳った。

襦袢と股引できっちり身支度をすませ、朝仕事から源六が戻ると、炉端に呼んで長い間話し込んだ。又蔵のすることを、ハツは眼を瞠ってひとつひとつ見ている。又蔵は、今日秋田に発つのだ、と思った。

又蔵が家を出たとき、鶴ヶ岡のご城下一帯は、薄い霧に包まれ、霧の向うに赤茶けた日輪がのぼりつつあった。

黒っぽい野面の隅に雑木林があり、鶴ヶ岡に行く道は、葉の落ちつくしたその雑木林に突き当ってから、まっすぐ野面を北に横切ってのびている。小脇に風呂敷包みと刀を包んだ菰を抱えた又蔵の姿は、その道をひとりの百姓の若者が行くように、次第に遠ざかって行った。

柿の木の下で、ハツは源六と並んでその姿を見送った。

「秋田さ行けば、もうおら家さはくることもあんめえの」

とハツは呟くように言った。源六が振り向いた。その顔が蒼ざめているのにハツは驚いた。

「秋田さ行ったなでね」

と源六は意外なことを言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton